

ジャーナリストカフェ  福岡

福岡から考える 「多文化共生の未来」



2026年7月12日

13:00~16:00 (受付時間/12:30)

会場 電気ビルみらいホール

福岡市中央区渡辺通2-1-82
電気ビル共創館4F

対象 メディア、報道、
ジャーナリストに興味がある
大学生・高校生・社会人

定員 400人(先着順)

参加費 学生・生徒…無料
一般…1,100円(税込)

テレビ朝日「報道ステーション」キャスター
大越 健介

紛争など不安なニュースが続く毎日です。
だからこそ不安の正体を見つめ、克服し、
多様性あふれる社会を再構築することが
求められています。そのために私たちに
必要なこととは?皆さんと共に考えたい
と思います。

- 共催/西日本新聞社、カナリア舎
- 協力/文化工房、福岡女子大学
- 助成/公益財団法人放送文化基金



イベントWebサイト

学生の方



参加申し込みはこちらから



一般の方

私たちの社会が追い求めてきたはずの「共生」が今、岐路に立っています。急増する外国人労働者が地域を支える現実の一方、そこには摩擦もあり、事実と憶測が入り混じるSNS時代ならではの不安と不信が広がっています。社会の分断を防ぐには、どうすればいいのでしょうか。

西日本新聞社が大学生とつくるコミュニティメディア「学生のミカタ(ガクミカ)」と、テレビ朝日「報道ステーション」キャスター大越健介さんの「ジャーナリストカフェ」が、アジアに最も近い都市・福岡でコラボ。世代を越えた対話で多文化共生の未来を考えます。



大越 健介

〔おこし・けんすけ「報道ステーション」キャスター〕1961年新潟県生まれ、85年NHK入局。政治記者として橋本政権や小淵政権を取材。ワシントン支局長の時にはブッシュ大統領の単独インタビューや2008年の米大統領選の取材を指揮した。20年以上の記者経験をいかしNHK「ニュースウォッチ9」「サンデースポーツ2020」でキャスターを務める。2021年にNHKを退社し、21年10月から現職。「行動するキャスター」を自任し、ロシアによるウクライナ侵攻などの現場に自ら足を運んだ。「平たい言葉で伝える」ことを信条にしている。

パネリスト プロフィール

第1部



飯田 和郎

福岡女子大学 副理事長
元毎日新聞外信部長・RKB毎日放送解説委員長
新聞記者として佐賀、北九州で勤務後、北京、台北で計3回10年間、特派員を務める。赴任先の外交・内政ほか、市井の人たちの声に耳を傾けるよう心掛けてきた。



長田 健吾

西日本新聞 編集局報道センター記者
神奈川県出身。外国人労働者との共生を地域から考えるキャンペーン報道「新移民時代」の取材班として、技能実習生を巡る問題などを取材。現在は福岡市政の取材を担当。

第2部



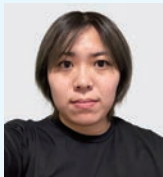
渋谷 実花

「学生のミカタ」学生記者 福岡女子大学4年
福岡国際空港株式会社などの地場企業や学生団体を取材。大学の教育寮運営や日本語教員養成課程でタイでの教育実習を経験。小学4～5年時に西日本新聞こども記者(4期)。



保坂 柚花

「学生のミカタ」学生記者 九州大学4年
ドラッグストアモリなど様々な業態の企業への取材の他、「ガクミカ」のリアルイベントでは統括リーダーを経験。大学では言語学を専攻し、現代日本語の意味や仕組みを研究中。



徐 嘉莉

福岡女子大学4年
中国出身。高校卒業後に来日し、大学では国際経済を中心に学ぶ。地域の外国人共生イベントや学生寮の運営に参加。留学生主体の国際交流サークルでは部長を務める。



パウデル・スシル

インド料理店経営(福岡市東区・博多区)
博多警察署協議会会長
ネパール出身で同国の大学を中退後、2008年来日。福岡市内の専門学校を卒業し、2010年から飲食店を経営。経営の傍らネパール語の通訳も行い、来日間もない外国人に日本の文化やルールを教えている。

※登壇者は変更になることがあります。

プログラム

第1部 基調講演

ジャーナリストの大越健介氏、アジア報道の経験が豊富な元記者で、国際化に注力する福岡女子大学の副理事長を務める飯田和郎氏、外国人労働者を巡る問題を取材してきた西日本新聞の長田健吾記者が、SNS時代のメディアリテラシーやメディアの役割を語り合います。

第2部 パネルディスカッション+ 来場者セッション(学生との対話)

大越氏と、福岡で学ぶ大学生・留学生、福岡で暮らし働く外国ルーツの人々が語り合い、会場の一般参加者も交えた双方向の対話を通して、私たちの社会の明日を考えます。

アクセスマップ

